

## 2 滋賀大学のカナメとして

滋賀大学 理事・副学長 横山 俊夫

社会連携研究センターの課題として、このところ学内でふたつのことが意識されています。ひとつは、センターの諸活動と学部で行われている教育とのつながりを強めることで、学生諸氏の専門知識と実践力とをともに伸ばすこと、いまひとつは、それらの活動がより広く学内外に知られるようにすることです。

現在、日本の大学は大きな転期にあります。それぞれの大学の個性をあらためて確認し、それを輝かせようとしているのです。これは世界的な傾向でもあります。少し前までは、いくつかのメディアが発表する大学ランキングに過敏でした。しかし大学は、単純に数値で表して序列化することはできません。じつは、個性を重視するこの流れには、20世紀末からの高性能情報機器の日用品化が世界の人びとにもたらした、ある発見がからんでいます。それは、人間活動が及ぶどのような領域も“正解がひとつではない課題”で充滿しているということの発見です。第2次大戦後、多くの大学が、真理の探究や教育においては国境なしの信念のもと、つまり自然科学の前提を他の学問領域にも素朴に拡張して活動を進めたことに対して、冷静に振り返るゆとりが生まれています。

あらためて、土地ごと、時代ごとの“よりよい解”（この“よい”の意味が難しい！）を求めて、かかわりある人びとの暮らしや、未来に予測される環境変化も視野におさめつつ現場でもとに考えることが必要になっています。ある時どこかで生まれた理論を機械的にあてはめようとする前に、目の前の地域において自然と人間が織りなしてきた風土に向きあうことがまず大切です。もちろんこの作業の行くすえに、広く応用可能な理論が生まれることもあるでしょう。いまこそ、創造が各地に芽生える時ではないでしょうか。

かつて大学の社会連携といえば、社会に知識を提供する一方向の活動とイメージされがちでした。その思い込みから解放されるにつれ、多分野にわたる対話と協働のなかから新たな知識や知恵が生まれる瞬間に立ち合う喜びが増しております。個人の資質は大切ですが、それがすべてではなく、自他の組合せのありようこそが創造のもとです。昨秋の「生涯学習まちづくりワークショップ」（瀬田）や「農を考える滋賀大学」（長浜、びわ湖環境ビジネスメッセ2013のブース）などで見た滋賀大生や「地域活性化プランナーの学び直し塾」同窓生、「環境学習支援士」の方がたの輝く笑顔が印象に残っています。さまざまな協働を媒介する機能を強めている社会連携研究センターは、滋賀大学の内と外の、多彩な組織や個人をつなぐカナメです。大学全体でこのセンターを支援しているのもそれ故です。今後のさらなる展開を願っております。